郎，本間憲治，川口英弘，村山祐一，塚田一博：肝障害患者の術前術後におけるラクツロース投与の経験．臨床と研究 **55**(10)：3300－3304，1978.

11） 吉岡一典，吉田奎介，清水武昭，金沢信三，高野征雄，阿部要一，本間憲治，武藤輝一，伊藤博：原発性肝癌の治療成績――切除不能肝癌に対する門脈枝結紮例を中心として――．臨床外科 **33**(10)：1469－1476，1978.

12） 田沢賢次，阪本恵子，島田寛治：人工肛門受術者の医療保障．看護展望 **3**（8）：43－57，1978.

13） 田沢賢次，阪本恵子：人工肛門における浣腸療法時の注入液量の速度．看護実践の科学 **3**（1）：46－50，1978.

14） 高木隆治，田沢賢次，田島健三，島田寛治，阪本恵子：人工肛門造設者における排尿障害について（第1報・アンケート報告を中心に）．新潟医会誌 **92**(9)：602－611，1978.

15） 田島健三，曽我淳，武藤輝一，田沢賢次，藤巻雅夫：教室の結腸癌手術成績――左半結腸癌を中心に――．新潟医会誌 **92**(1)：57－60，1978.

16） 斉藤寿一，小林清男，曽我淳：胃 adenoacanthoma の一例．外科症例 **2**（9）：661－663，1978.

4．著 書

藤巻雅夫，小林清男，武藤輝一：胃全摘と再建術式．今日の臨床外科（第7巻）123－144頁，メジカルビュー社，1978.

整 形 外 科 学

教 授 辻 陽 雄
助教授 玉 置 哲 也
助 手 山 田 均
助 手 小 林 健 一

1．研究概要

教室における研究主題は脊椎脊髄外科であり，これに関連する基礎的臨床的研究を展開しつつある。現在行なっている基礎的研究にあっては誘発脊髄波による脊髄機能の解析と障害予防に関する研究，各種末梢神経損傷，脊髄障害における微小循環と機能回復，末梢神経 partial lesion に関する修復法と神経再生に関する基礎的問題等でありこれらは開設年度すでに着手している。

臨床にあっては，いわゆる low back pain syndrome の病態に関する解析，脊椎老化の実相と対策，脊椎外科手術法の技術開発などを行なってきている。

昭和54年度より新教員の着任に伴い，これに加えて骨肉腫診断に対する診断用 myosine の開発研究，椎間板組織奇形と椎間板ヘルニア発生との相関性，および微小循環生理よりする四肢長管状骨成長のコントロール等を計画し，目下準備中である。

2．学会報告

1） 礒辺啓二郎，山田均，辻陽雄：腰部の硬膜内椎間板ヘルニアの3症例，第50回中部日本整形外科災害外科学会，1978．4，大阪.

2） Tsuji, H., Yamada, H., Itoh, T., Hosaka, E. and Isobe, K.：Anatomical and clinical considerations on lumbar spinal stenosis, cauda equina laxity and its significance., XIV World Congress of Sicot, Oct., 1978, Kyoto.

3） Itoh, T., Tsuji, H., Tamaki, T., Yamada, H. and Toyoda, A.：Clinical consideration of the dissociated motor loss syndrome (keegan), XIV World Congress of Sicot, Oct., 1978, Kyoto.

4） 玉置哲也，山田均，辻陽雄，中川武夫，小林英夫：脊髄障害高位スクリーニングを目的とした傍脊柱筋々電図検査について，第51回中部日本整形外科災害外科学会，1978．11，金沢.

5） 山田均，辻陽雄，玉置哲也，小林健一，鎌田栄，伊藤達夫，西能竑，吉岡勉：腰部癒着性脊髄膜炎について，第51回中部日本整形外科災害外科学会，1978．11，金沢.

6） 玉置哲也，山田均，辻陽雄，小林英夫，中川武夫，豊田敦：誘発脊髄活動電位の基礎的検討，第8回日本脳波，筋電図学会学術大会，1978．10，金沢.

7） 小林英夫，中川武夫，井上駿一，玉置哲也，山田均：誘発脊髄活動電位・その臨床応用における二，三の知見，第8回日本脳波，筋電図学会学術大会，1978．10，金沢.

8） 辻陽雄，玉置哲也，山田均，小林健一：斜側腹切開による腰椎々体間固定術(映画)，第595回千葉医学会整形外科例会，1978．12，千葉.

9） 玉置哲也，山田均，小林健一，辻陽雄，小林英夫，中川武夫：誘発脊髄電位の波形分析とその新知見について，第595回千葉医学会整形外科例会，1978．12，千葉.

10） Tamaki, T.：Prevention of iatrogenic spinal cord lesions., XIV World Congress of Sicot, Oct., 1978, Kyoto.

11） 鎌田栄，藤井保寿，小林健一，辻陽雄，西能竑：Pseudoachondroplasia と思われる一例，第595

回千葉医学会整形外科例会，1978．12，千葉．

12） 辻陽雄：En-bloc laminectomy，第51回日本整形外科学会総会，1978．5， 盛岡．

13） 辻陽雄：シンポジウム・多数回手術を要した腰椎疾患への対策――主としてanterior からの対処――，第27回東日本臨床整形外科学会，1978．9，札幌．

14） Inoue, S., Tsuji, H., Murata, T., Tamaki, T. and Tanaka, T.：Anterior interbody fusion for the lumbar disc lesion――Long-term follow-up results over ten years――XIV World Congress of Sicot, Oct., 1978, Kyoto.

15） 辻陽雄：不安定性をともなう腰部椎間板ヘルニアに対するCloward 椎体間固定術変法，第69回北陸整形外科集談会，1978．12，金沢．

3．原 著

1） 山田均，高木学治，高橋淳一：多発骨折症例の検討．日災医誌 **26**：7－12，1978．

2） 渡辺恒夫，宮坂斉，井上駿一，玉置哲也，小林英夫：教室における切断肢再接着30例の経験．千葉医学会誌 **54**：235－241，1978．

3） 渡辺恒夫，井上駿一，辻陽雄，宮坂斉，伊藤達雄：頸椎後縦靱帯骨化に対する前方除圧法．手術 **32**：59－67，1978．

4） 辻陽雄，宮坂斉，高橋和久，野口哲夫：頸椎前方除圧，固定術における術中術後の頸椎姿勢と一過性脊髄障害．中部整災誌 **21**：450－452，1978．

5） 保坂瑛一，辻陽雄，小林影，栗原真：Degenerative spondylolisthesis redundant nerve roots. 整形外科 **29**：538－542，1978．

6） 伊藤達雄，辻陽雄，坂巻皓，布施吉弘：著明な腰椎側方辷りに伴うparaparesis．臨床整形外科 **13**：786－789，1978．

7） Tsuji, H. and Tamaki, T.：Studies on the intraosseous blood circulation and bone marrow pressure in human lumbar vertebrae, Internat. Orthop.（Sicot） **2**：17－24，1978．

8） 辻陽雄：En-bloc laminectomy.，整形外科，**29**：1755－1761，1978．

4．総 説

辻陽雄：脊柱の加令変性と臨床的意義．総合リハビリテーション **6**：333－338，1978．

5．著 書

1） 辻陽雄：脊髄先天血管奇形，中山恒明・榊原仟監修・新臨床外科全書，17－Ⅰ，42－46頁，金原出版，1978．

2） Tamaki, T.：Clinical application of spinal cord action potentials. Clinical application of spinal cord monitering for operative treatment of spinal diseases. ed. C, L. Nash, Case Western Reserve Univ.，1978．

6．その他

1） 辻陽雄：脊椎外科研究会（東京）総括非結核性炎症．臨床整形外科 **13**：410－412，1978．

2） 辻陽雄：肩，腰，膝の見方，考え方――他科のための整形外科――．富山保健医協会発行，1978．

3） 玉置哲也：第12回S. R. S. meeting（香港会議）印象記．臨床整形外科 **13**：621－622，1978．

産 科 婦 人 科 学

教 授 泉 陸一
助教授 柳沼 忞

1．研究概要

1） 泉：性器癌の基礎的・臨床的研究を進めている。とりわけ卵巣腫瘍について診断法の探究と合法的な治療基準の設定を試みている。診断法については生化学的アプローチの一つとしてＣＥＡ測定の意義と限界を明らかにした。卵巣腫瘍における境界病変について核径，核ＤＮＡパターンなどの形態学的検討を行ない，その成績に臨床像を裏づけることにより境界病変の腫瘍性格を究明し，本腫瘍の診断ならびに治療方式の確立をめざしている。

組織培養法を用いて腫瘍の制癌剤に対する感受性に関する検討を引続き行っており，治療の個別化による治療成績の向上のための基礎データーを求めている。

2） 柳沼：ｉ）婦人において視床下部―下垂体―卵巣系の正常な働きは，排卵現象の存在によって代表される。この現象は種々の因子によって阻止されるが，比較的多いのはストレスによるものである。ストレスによる無排卵・無月経症の内分泌的研究および統計的研究により，その治療方針を確立した。しかしながら，かかる疾患の発生および進展機構には未だ不明な点が多く，現在さらに研究中である。

ii） これに関連して，他の種類のストレス，すなわち手術・麻酔や妊娠，分娩における婦人の内分泌的変化を検討中である。

iii） プロラクチン高血症による無排卵症をＣＢ154により治療すると共に，その発生機構を研究中である。

iv） 胎児内分泌機能のうち，成長ホルモンの胎児成長に対する意義を検討し，子宮内胎児発育遅延の